

米作りを通して 社会福祉法人 さつき保育園 (和歌山県 和歌山市)

5月中旬種籾を水に浸けて発芽させる

5才女児・男児<驚き・不思議・考える力・問題解決能力>
 女児「水に浸けたら芽出るんやなあ」
 「そのまま放っておいても何にもならんでな」。
 「なんで水の中に入れてたら芽出てくるんやろ？」
 男児A「お花でも何でもお水なかつたら枯れるやん」。
 男児B「お水を飲んだから元気になって出てきたんやで」
 保育士「そうね、良いところに気づいたね。きっと今までは水がなかったから芽を出さずにじっと待っていたんだね」。
 男児B「(得意そうに)早く大きくなったらいいのに」

<環境設定>

- ・ 事前に農家の人に栽培方法を聞く。
- ・ 田んぼをつくった。
- ・ 米作りの写真と実物の籾を見せた。
- ・ かかしづくりに必要な廃材を集めた。



6月初旬発芽した籾を苗床に植えかえる



5才女児・男児<考える力・思いやりの心・問題解決能力>
 男児A「なんで、すぐに田んぼに植えへんのやろ？」
 「広いところに植えた方がすぐに大きくなりそう」
 女児A「でも風とかに吹かれたら飛んでいってしまうで」
 女児B「そうやで広いところはまだ赤ちゃんやのに怖いで」。
 「かわいそうやで」
 男児A「そうか。そうか」。
 「やさしく、籾を持たんとかわいそうやで」。
 (みんなに向かって言っている)

6月下旬苗床から田へ苗を植えかえる

5才女児・男児<考える力・思いやりの心・好奇心>
 男児A「やったー！田んぼに入れる。泥の中に入れる」。「(入って)うわー、気持ちいい」
 「きっと苗も気持ちいいと思うやろなあ」
 男児B「曲がらんとまっすぐ植えるの難しいなあ」。「他のを倒してしまいそう」。
 男児C「みんなこけたら、泥まみれになるで。僕みたいに」
 女児A「次こそ、めっちゃめっちゃ大きくなっていくなあ。私の背超えるかな」。
 女児B「どうやろ。先生！！どれくらいまで大きくなるん？」

保育士「きっと、十分栄養もらって順調に生長したらこのくらいになるよ」。(子どもの肩位を指す。)

女児A「ふーん。早く早く大きくなって欲しいなあ」
 女児B「うん、うん。楽しみ、楽しみ」。
 男児C「先生、僕の家近くに田んぼあるんやけど、かかしとか色々キラキラの飾りつけてあるん見たことあるで」。
 女児A「私も見たことある。なんであんな付いてるんやろな？」
 男児C「なんでやろ。悪い泥棒ビックリするからかなあ」。
 保育士「泥棒って人に限らないよね。さてさて、まず初めに何をねらって田んぼに入ってくると思う？」
 子どもたち「(手を挙げて)はい、はい、はい。」
 保育士「Dくん」
 男児D「そら、お米やろ。まだ苗の時とっても仕方ないやん」。
 男児E「虫いっぱいいるから、虫もとりにくるんとちゃう？」
 男児D「でもよ。でもよ。畑にもいっぱい虫いるけど、かかしとかはないで」。
 男児E「そうやな。お米取られたら嫌やもんな」。
 子どもたち「お米や、お米取りにくるんや」。
 保育士「じゃあ、誰がお米をねらうのかな？」
 子どもたち「はい、はい、はい」。
 保育士「Fくん」



男児F「鳥やと思う。だつて虫やったら、かかしで逃げへんもん(逃げないから)。
子どもたち「鳥や!」「カラスや!」「スズメや!」「絶対そうや。」
「よーし、かかし作ろう。かかし作りたい!ねえ先生、良いやろ?」
保育士「よーし、みんなで作ってみよう」



7月上旬かかし作り

5才児<楽しさ・好奇心・創造性・喜び>
子どもたち「先生!缶ちょうだい。顔作りたい」。
「うわー。面白い顔になった「わっはっはっは」」。
「帽子も作ろう。かわいいのにしよう」
「服も作ろう。○○ちゃんもおいで」
「こっち描くから、そっち描いてね」
(できあがり!)
「これやったら絶対、鳥来ないよ」
「怖いもんない」。
「これでお米たくさん食べられるなあ」



9月中旬お米収穫

5才児<喜び・感謝>
子どもたちは保育士に鎌を持たせてもらい、稲と一緒に刈る。
子どもたち「わあー刈れた刈れた。ザって音するで」。
保育士「気をつけてね」。
子どもたち「すごい、すごい。簡単に刈れた」。「気持ちいい」



9月後半粃取り

5才児<好奇心・楽しさ・喜び>
子どもたち「粃取るの面白いなあ」。
「こんなにして取るんやなあ」
「ザラザラザラって続けて取れるで」。
「面白い。面白い」。
「あれだけ沢山あったのに、粃になったら少ないなあ」。
「1粒でもこぼさないようにせな。もったいないなあ」。



【反省・評価・考察】

今年初めて米作りを試みた。保育士自身もどこまで稲が育つか自信はなかったが、できなかつたらできなかつた理由を子どもたちとともに考えて改善しながら進めていこうと踏み切った。

実際米作りをはじめてからは、保育士が米作りに必要な道具を子どもたちに見せて手順を告げると、なぜその道具や手順が必要なのかを子どもたちが自分なりに考え作業をした。これは保育士自身も驚きであり、子どもたちが米作りに興味や関心が持ったという証拠でもある。また、米作りをすることで、給食にもあるごはんも残さず食べるようになった。ごはんを食べる量が全体的に増えたということもとても嬉しい事である。

今現在、子どもたちが育てた米は粃の状態であり、これから瓶と棒を使って精米して、おにぎりパーティーをする予定である。これから子どもたちのどんな発想や発見があるか引き続き楽しみである。

みどころ

5月から9月まで(実際には10月精米11月おにぎりパーティーまでの期間でした)稲にかかわった長期間に及ぶ取り組みですが、種の発芽、苗床での栽培、田んぼづくり、田んぼに植え替えて栽培、かかし作り、お米の収穫、粃取りなど、折々の活動での豊かな経験を楽しめたことが分かります。このように、栽培活動に加えて取り組みの過程で多くの特徴的な活動を進めるためには、計画的な環境設定や幼児への的確な助言が必要です。保育者主導の場面が増え、幼児の主体性や創造性を見逃してしまうようなことも考えられます。しかしこの事例では、幼児の経験をキーワードでおさえ、幼児の言葉をひろって興味や意欲など主体的な姿を把握して成果として捉えることができました。また、見通しを持って環境設定をしたことも、重要なポイントになっています。こうして、小さなお米ができるまでの一つ一つの取り組みが心に残る活動になったことで、次の作業や活動への期待や意欲が高まり、道具や手順を自分なりに考えて作業をするという、子どもたちの科学する心の育ちに結びつく姿を確認しながら保育を重ねることにつながりました。